読み物教材「みんなで夢を追いかける」（後半）

カズはだんだんイライラしていきます。「おれはこんなにしてやってるのに、ユウはなんでわかってくれないのか。」そんなとき、あることに気付きます。ユウは何かあると、いつもミキの側にいる。「おれとミキの何が違うのか…。」

ミキは静かで、班長に立候補したことはありませんでした。しかし、いろんな人の相談を聞いて、おかしいことはおかしいと伝えたり、悩んでいる人にあたたかい言葉をかけて励ましたりする生徒でした。そんなミキがユウと、どう関わっていくのかということにカズは目を向けはじめました。すると、あたりまえのことに気付きます。

ミキはユウの話を聞いているのです。

「どうして教室を飛び出すの？」「何かいやなことがあったの？」

「でも、ドアを蹴っちゃダメだよ。」

「どうすれば、落ち着いて教室にいれるかな？」

上手く話せないユウにゆっくり聞いています。ミキは特別なことをしているわけではありませんでした。障害があるからとか、できないからとか関係なく、一人の友だちとして、クラスの仲間の一人として自然に、あたりまえに関わっているのでした。ユウには障害があってできないから「正しいことを教えてやる」という意識を持って関わっていたカズは、自分の「上から目線」な意識に気付きます。